

相談支援つうしん

<第 63 号>2020 年 7 月 22 日
県立湘南養護学校 支援連携部
相談支援係 ～教師編～

～巡回相談でのこと～

地域の小学校の特別支援学級に巡回相談に行った時のことです。探索行動のある児童に対してどのように指導したらよいかという相談がありました。授業での様子を参観していると、校内にお気に入りの場所がいくつかあるらしく、授業中でも気が向いたら教室から出ていくことがありました。担任の先生はその都度声をかけたり制止したりしていましたが、苦戦している状況が 1

ちょっと待ってー!



年以上続いているとのことでした。担任の先生の願いとしては、“勝手に教室から出ていかず教室にいてほしい”というものでしたが、課題解決を図るにはいくつかの段階を踏む必要がありました。

★目標：行き先を伝えてから出ていくこと（＝勝手に教室から出ていかない）

この児童は音声言語のない児童で、行きたい場所は図書室、テラス、畑の 3 つでした。そこで、3 つの場所の写真カードを作成して掲示しておき、休み時間を利用して、担任が先手を打って児童に写真カードを見せてから一緒に探索する時間を作るようにしました。飛び出してからカードを見せても心はずでに目的地なので、先手を打つことが重要でした。

このやりとりを何回か繰り返した後に、教室入り口に写真カードをマグネットで貼っておくことで、児童が自分からカードをはがして先生に渡せるようになりました。ちなみに、カードを掲示したままにすると、カードを渡せばいつでも外に出られると勘違いしてしまうので、行ってもよい時間になると掲示するようにしました。同時に、カードを渡してこないときには探索には応じないようにしました。

担任の先生とは随時連絡を取り合あって進捗状況を確認したところ、飛び出しは減って、必ずカードを渡してから出ていくようになったとのことでした。そして、次の段階として“今は行けないよ、後でこうね”の交渉に応じて気持ちを切り換えたり我慢したりすることが課題だそうです。後日、担任の先生がポロっと言われた言葉が印象的だったのでご紹介します。「カードで行く場所を教えてくださいになって、ずいぶん楽になりました。それまでは、いつ飛び出すかとずっと気を張っていないといけなかったのです。」発信できるようになることで、行動が少しずつコントロールできるようになってきた事例でした。

★「カードはやってみただけど上手くいきませんでした。」という指摘に対して

地域の学校の相談で聞く言葉です。話をよく聞いていくと、先生が児童生徒に言うことを聞かせるために、先生の要求を表す絵・写真カードを子どもに見せています。子どもはカードの意味は分かっている、自分の気持ちにそぐわない内容なので、応じないことも少なくないです。そして、視覚的に提示しても子どもが応じてくれないので、“カードは有効ではない”という結論に至るようです。“視覚支援”とよく耳にしますが、何でも視覚的に提示すれば効果があるというわけではなく、使い方がやはり重要です。コミュニケーションを図るのに視覚的なツール（AAC）を使うときには、大人が子どもにやってほしいことから導入するのではなく、子どもがやりたいことを叶えることから始めます。子どもが使ってよかったと思うことでスキルは獲得されるので、導入で失敗しないことが肝心です。

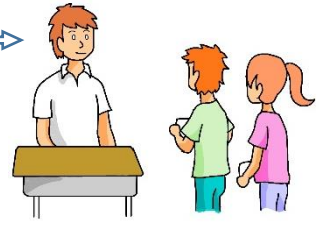
～校内の風景～

★確かな力を身につけるー報告スキルー

小学部の課題別学習における 1 つの形態として、5、6 人の児童がそれぞれ自分の自立課題に取り組み、1 つ終わると担当の教員のところに行って“終わりました”と報告をし、新しい課題をもらったりチェックしてもらったり

するという形態をとることがあります。この形態は、高等部の校内実習や実際の就労場面につながるもので、報告を受ける教員は必要なチェックだけをします。この教員の役割は、最終的には子どもへの配慮の仕方を知らない人でも担えるとよいです。それは言い換えると、子どもがどんな相手に対しても適切に報告できる確かなスキルを身につけていることを意味します。買い物学習では上手にできても、実際のコンビニでは買い物ができなければ、そのスキルはまだまだ向上の余地があります。もちろん、さまざまなツールを使いこなすスキルを身につけることも含めてのことです。クラスの担任相手に十分やり取りができるようになったら、今度は管理職など子どもと接点の少ない人に役割を担ってもらい、どのくらい子どもがスキルを発揮できるかアセスメントするのもよいと思います。

児童が発信してから応答するようにしています。



★黒電話からスマホ（5G）の世界へ



小学部の実践を書いていると思い出したことがあります。PECS などの AAC を活用して子どもたちの発信する力を伸ばすという指導技術が浸透する以前には、①「**(音声で)しゃべれるようになることが大事**」とか、②「**口で言えば分かるんだから**」、③「**卒業後は使わないんだから**」という理由で、音声以外の方法を使って子どもが自分の気持ちを伝えるという発想自体が少なかったと思います。現在はスマホにアプリを入れてやり取りをする方法もあります。ウン十年前の黒電話とは違って、今のスマホは使いこなせないほどの機能がたくさんあり、利用することに抵抗を感じる人もいます。

心理学の概念に行動モメンタム理論というものがあります。モメンタムとは“勢い”という意味です。動いている物は動き続けようとし、止まっている物は止まり続けようとする物理の慣性の法則と同じ原理が、人間の行動にも働きます。慣れ親しんだ考え方やスケジュール、行動パターンが長ければ長いほど、それが崩れるとストレスとなり、変えることに抵抗を感じます。コロナ禍による新しい生活様式と言われても、すんなりいくことばかりではないのと同じです。新しい取り組みに伴う“昔はよかった”“これまでずっとこうやってきた”という思いは、正に慣性に対する抵抗が生じた瞬間だと言えます。

それと同じで、指導方法や指導技術の進化、求められる人権意識も随分変わり、以前は通用していた考え方も PC 同様アップデートが必要です。時には追いつくことが大変に感じることもありますが、さすがに黒電話だけでは現代を生きていくのは不便です。本人は平気でも周りが困ることもあります。慣れ親しんだ指導法や考え方は大事にしつつも、時代とともに変えるべきものは柔軟に変えて(=進化)いけるようにしたいと、頭の固い私は自戒を込めて思います。

自分のアップデート、なかなか大変です

①「**(音声で)しゃべれるようになることが大事**」

⇒音声以外の方法も使って、自分の思いを相手に分かりやすく伝える力を獲得することが大事です。それが結果として、発語を伸ばすことにつながりやすくなります。

②「**口で言えば分かるんだから**」

⇒気持ちや意思が受け止めてもらえるようになると、行動や気持ちの調整が図りやすくなります。

③「**卒業後は使わないんだから**」

⇒進路先から生徒が使っているツールを同じように使いたいという声も聞くようになりました。私たちが積極的に使うことで、進路先の取り組みも変わります。